

Title	一九九四年度修士論文要旨；一九九四年度卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1995
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.64, No.3/4 (1995. 4) ,p.138(392)- 156(410)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19950400-0138">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19950400-0138</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 彙 報

### 一九九四年度修士論文要旨

#### 〔日本史学専攻〕

##### 古代東国の地方豪族に関する一考察

——『日本靈異記』下巻第七縁を手がかりに——

齊藤 瑞木

『日本靈異記』は薬師寺の僧景戒が著した古代における代表的な説話文学である。その下巻第七縁には、武蔵国多摩郡小河郷の丈直山継を主人公とする観音利益譚が収められている。本稿は、この説話を題材として、説話に登場する個々のフアクターを具体的に検討し、そこで明らかにされた主人公山継の姿を通じて古代東国の地方豪族のあり方についての考察を試みた。説話文学を歴史史料として扱うにあたっては、そこからたんに歴史的事実を抽出し、説話作品にも史実性が認められることを追究するのではなく、説話の裏側に潜む背景を読みとり、そこから従来は描きえなかつた古代史の一面を描くという方法論を用いている。

説話中、丈直山継は征夷事業に参加、その後藤原仲麻呂の乱にかかわり、死罪に列せられるが、観音の加護により助かり、ほどなくして多摩郡の少領に任じられている。まず、説話の直接的な背景を探る場合、一地方豪族である山継が中央の政争にかかわることになる背景として、牧の存在を考えた点に本稿の特徴がある。山継の本拠地の多摩郡小河郷には、仲麻呂政権の経済的・軍事的基盤の一翼を担っていた可能性のある小川牧の存在を想定でき、郡司級豪族たる山継は牧の現地担当官としての責を任っていたと考えられるのである。つまり、牧を媒介として地方豪族丈直山継と仲麻呂政権は有機的に結合していたのである。山継の征夷事業への参加、そして後の郡司任官についても、牧を背景とした強大な軍事力にもとづくものとして考えてみた。

一方、当時の地方豪族をとりまく大きな時代状況について説話を手がかりに眺めていくと、郡司の持つ軍事力の問題への言及が可能になる。すなわち、律令国家は郡司層を軍事活動に用いざるをえない側面があつたわけだが、山継のような牧を基盤とした軍事力の問題も、その延長線上の問題としてとらえることができるということである。この問題に関連して、騎兵軍のあり方についても若干考察を加えている。また、東国のような地方社会における観音信仰の受容の問題については、武蔵国における観音菩薩像の発掘事例なども鑑みて、地方豪族を中心に観音信仰は浸透していたことを明らかにした。

## 近世前期京都の市街地形成

——「鴨東地区」開発の事例を中心に——

保坂 綾子

本稿は、近世都市京都の出発点を豊臣秀吉の京都大改造以後の「城下町」化に求め、その発展の方向性を明らかにしようとしたものである。

まず、「近世都市京都の原形」として①豊臣秀吉による一連の京都への都市政策、②江戸時代初期の高瀬川開鑿、③寛文の鴨川築堤と宝永大火以後の復興、という人為的、自然的条件から近世京都の骨格が整う点を指摘した。①では、とりわけ最終段階で秀吉が築造した「御土居」に着目し、近世の洛中・洛外概念と絡めながら、その成立意義を再検討した。②においては、開鑿者角倉氏の徳川時代における役割についても言及する事に努めた。

次に、御土居の変遷の検討に加えて、徳川時代に入ってから新たに宅地化の進んだ、所謂新地の分布を照らし合わせる事で、近世前期の都市京都の発展の方向性を示した。御土居の変遷に関しては、洛中洛外の境界である堤という本来の役割から、御土居の上物である藪竹の入用といった副次的な役割が重要視されるようになるという質的な転化が認められる。更に量的変化として、御土居の崩壊・破綻が挙げられ、その状況を詳細に検

討する事で、鴨川、高瀬川流域、東山山麓を含めた御土居以東、即ち「鴨東地区」の新地開発が活発に起こっている事が分かる。

最後に、「鴨東地区」の新地開発の重要性を踏まえた上で、その具体像に迫った。近世前期（十八世紀初頭）を意図しつつも、史料の制約上、元禄期～正徳期を中心とした事例の検討となる。具体的には、①「鴨東地区」の有力開発主として妙法院門跡に注目し、『妙法院日記』を中心素材として妙法院内の新地開発の事例、②同じく「鴨東地区」に知行地を有する祇園社領の例を取り上げ、代々祇園社家を務めた上河原氏に伝わる文書群から、とりわけ「諸事覚書」を中心に、検討を加えたものである。①では、特徴的な七条河原の開発とそれに伴う下層民の問題を指摘し、又、開発の諸相として開発手続き等を明らかにした。②では、特に、「鴨東地区」の複雑な土地関係を示したつもりである。総じて①・②の検討から、年貢の収奪・増収といった新地開発の目的を明確にし、また、条坊制を系譜とする洛中とは異なった特徴を持つ洛外、「鴨東地区」の様相を究明した。

本稿は、近世都市京都の東南方向へ偏重した発展を示唆するもので、高瀬川筋を通して、「京都」と切り離して考えられない「伏見」との複合的な関係を論じていく上の一段階として提示したものである。

近世日朝関係における譯官使

大場 生与

「譯官使」とは、朝鮮から対馬の宗氏に派遣された外交使節である。倭学譯官が正使となつたために譯官使と呼ばれるが、対馬島主の参勤帰国を問慰するための使節であるため、「問慰行」とも呼ばれる。本稿では、対馬の宗氏に派遣された譯官一行の使節の呼称として「譯官使」を用いた。近世日朝間において、日本からは、毎年多数の使節が対馬から朝鮮の釜山倭館に派遣されていたが、朝鮮からの使節は通信使と譯官使のみであり、しかも江戸時代を通じて十二回しか派遣されなかつた通信使と比べ、譯官使は五十八回にわたつて漢城と対馬の間を往復した。

通信使による徳川將軍と朝鮮国王との対等外交を蔭で支えたのは宗氏である。宗氏は幕府に代わつて日朝間の外交実務を行なう代わりに日朝間の貿易独占を保障され、朝鮮の釜山にある倭館において貿易や外交交渉にあつた。このような近世日朝通交体制のなかで、譯官使とはどのような使節であり、対馬においてどのようなことを行ない、どのような役割を果たしたのであろうか。従来の通信使の研究や、釜山倭館を通じた宗氏の通交貿易の研究に、譯官使の研究を加えることができれば、宗氏の位置をより明らかにするとともに、複雑な様相を呈する近

世日朝通交体制に新たな視点を加えることができることと思う。

本稿第一章では、近世を通して見た譯官使の派遣状況、譯官使派遣の行程、譯官使が対馬で行なつた儀礼を明らかにし、儀礼(特に宗氏の廟所及び位牌への拝礼と東照宮への拝礼)のもつ意味、譯官使の派遣目的について考察した。続いて第二章では寶永五年の譯官使を取り上げ、譯官使が対馬へ持ち込んだ三件の交渉用件、「交好一件」・「斛升一件」・「通事拝領銀一件」を具体的に考察することにより、日朝間になんらかの問題が生じた場合の朝鮮側からの交渉過程を明らかにするとともに、譯官使が儀礼だけでなく、実際の交渉も行なつていたことを実証し、譯官使派遣が朝鮮から対馬藩への重要な交渉の機会であつたことを明らかにした。そして第三章では譯官使と幕府との関わりを、譯官使に関する対馬藩から幕府への報告、対馬藩の幕府に対する援助要請、幕府からの実際の援助状況などから考察し、譯官使渡来の報告は近世の初期から行なわれ、また宗氏の要請によつて次第に譯官使が將軍家への慶弔用件を兼帯するようになり、日朝貿易衰退後には譯官使派遣が幕府に対する援助要請の名目のひとつとなつていたことを示し、譯官使が宗氏の地位を証明する性格を有していたこととともに、次第に幕府にとつても重要な使節となつていったことを明らかにした。

譯官使は、中世から宗氏に派遣されていた使節が、豊臣秀吉の朝鮮出兵の後に改編されたもので、宗氏に対する儀礼の使節であるが、宗氏にとつては自らの地位のアピールともなる使節であつた。一方朝鮮にとつては、日朝間の平和を維持するため

にそのパイプ役である宗氏に派遣した使節であり、宗氏に対する懐柔政策であったとも考えられるが、日本の国情を偵察するという目的も有し、また対馬への交渉の重要な機会ともなっていた。さらに幕府にとつても、譯官使が次第に將軍家への慶弔用件を兼帯するようになったことにより、通信使と役割を二分する重要な使節となつていったのである。

譯官使は、対馬・朝鮮・幕府のいずれにとつても意義のある使節であり、近世日朝間の外交・貿易を円滑に行ない、友好を維持するために重要な使節であつた。

### 近世中期の貨幣改鑄と錢

畑中 康博

貨幣改鑄は三貨と呼ばれる貨幣のうち貴金屬である金銀において行なわれるものであり、その改鑄下で卑金屬である錢をめぐる動きは従来あまり取り上げられることはなかつた。そこで本論では近世中期の元祿、正徳、元文改鑄を錢の視点から検討し、そこから近世貨幣史上の問題について論じた。

まず元祿、正徳、元文改鑄の政策遂行の過程を検討してみる。するとこの三つの貨幣改鑄に共通して見られる現象は錢の一時騰貴であり、時代が下がるにつれて相場騰貴が著しく、また幕府も対策に配慮するようになる。元祿改鑄の際の錢相場の騰貴は、金銀改鑄開始後しばらくしてから始まるが、正徳改鑄

では政策を打ち出した途端に騰貴が始まり、また元文改鑄では計画の一端に錢に対する政策を立案の段階から盛り込んでいたにもかかわらず、政策打ち出し直後の騰貴を防ぐことはできなかった。この原因は改鑄後の新銀の供給の問題とも関連しているが、時代が下がるにつれ重大化してくる背景には、財産の保全を図つたり、投機目的で買い占めを行なう商人の存在をあげることができるといえる。

一方、錢相場の抑制のために錢座が貨幣改鑄の度に開設されるが、そこで必要となる銅は元祿年間を頂点として減産傾向にあり、また輸出銅確保が優先される中で、早くも元祿期の錢座においてその不足が顕著であり、以後錢座開設には必ず問題となつた。

この結果元文改鑄期の錢座では青木昆陽の提唱により素材を鉄に落とした錢が作られ、錢相場騰貴という需要の大きさにより銅錢と同じように流通するようになる。また鉄錢の流通に成功するや、次は一枚一文の觀念から離れた錢が再び青木により提唱され、後の田沼時代に四文錢という形で実現している。

しかし、素材は銅・一枚一文という従来の錢の觀念から離れたタイプの錢が頻繁に作られるようになるに及んで、錢価は一両六〜八貫文の安値に下落するようになる。また貨幣改鑄時に顕著であつた錢の一次的騰貴も文政改鑄以降は見られなくなる。

従つて錢の視点から貨幣改鑄を論じることで、元祿、正徳、元文改鑄はそれぞれ錢の騰貴を招いた改鑄として区分すること

が可能なばかりでなく、その様相を一変させたのは元文改鑄期に登場した鉄錢であったことを指摘することができる。ここに近世貨幣史上の一つの転機を見ることができるのである。

## 〔東洋史学専攻〕

## チヨカン・ワリハーノフとカシユガル旅行記

鈴木 裕子

一八五〇年代は、ロシアが着々と中央アジアへの勢力の拡大を進め、一方清朝の領土である東トルキスタンでは、清朝の支配に対するイスラム教徒の反乱が頻発する時代であった。このような混乱した時期に、カシユガル地方の状況を調査するために、ロシアからカシユガルへ向かったのがチヨカン・ワリハーノフである。ワリハーノフは、ロシアの教育を受け、ロシアの軍人として活躍したが、実は中オルダのスルトンの家系出身のカザフ人であった。彼は三十歳の若さで亡くなってしまったが、その短い生涯のうちに、カザフスタン、天山地方、ジュンガリアなど各地を施行し、中央アジアの歴史、地理、その地に居住する諸民族の言語、習俗などを記録した。ワリハーノフは、一八五五年から五九年にかけてほぼ毎年のように旅行に出かけたが、その中で最も重要な旅行であるとされているのが一八五八年から五九年に行なわれたカシユガル旅行である。

当時のカシユガル地方は政情が不安定であったため、ワリハーノフの旅行は表向きはロシアの軍人としてではなく、キルギス人の商人に扮して行なわれた。彼は、カシユガルにおよそ五カ月半の間滞在し、カシユガル地方の状況や歴史についての情報を手にいれた。ワリハーノフは、カシユガルで手にいれた情報に自分自身の考えも加えながらいくつもの論文を書いた。そこで、修士論文ではそれらの論文をもとに、ワリハーノフの生涯と彼のカシユガル旅行の様子、カシユガル地方の地理や経済活動も含めた当時の状況、歴史について考察した。

カシユガル地方の歴史については、一八二〇年代より始まったカシユガル・ホージャ家の清朝に対する一連の反乱を中心に扱った。というのも、ワリハーノフが、カシユガル・ホージャ家の存在を無視して東トルキスタンの歴史を振り返ることはできないと考えていたためである。ワリハーノフはカシユガル・ホージャ家の反乱の経過や意義などについてかなり詳しく調べ、その結果、当時カシユガル地方が混乱した状況にあった原因は、カシユガル・ホージャ家内部の対立と、ホージャ家を利用しようとするコーカンドの存在にあり、それらがなくならない限りはカシユガル地方に平穏は訪れないという結論をだしたのである。

## 中世マグリブのミナレット

細野 喜代

本論文ではミナレットの歴史的な変遷を、専らイスラム史自体の中でみていく。そして比較的未研究の分野であるマグリブのミナレットに関して、それが建てられた理由を当時の政治的、宗教的な背景と結びつけて考察を加えた。

その前段階として序章ではまず、従来のミナレット研究をめぐる諸説を紹介し、それらに対する問題点を指摘した。そして次にイスラム初期に建てられたモスクには、階段ミナレットと名付けられた建物が存在した点を明らかにした。しかしこれは直接塔へと結びつくものにはならなかった。ウマイヤ朝時代においてアラビア語でミナレットを指す語は、道しるべ、境界線・灯台、メデイナの預言者のモスクのまわりに建てられた細長い方形の塔を指していた。アッバース朝時代になるとそこには新たに金曜モスクにある塔という意味がつけ加えられた。このように本論文では金曜モスクへの一基の塔の附設年代を、アッバース朝時代の初期であるとした。それは、六つの都市にある最初期の現存するモスクの塔の成立年代から推測を行った結果である。また、首都バグダードにあった高い宮殿建築がモスクの塔へと移行したのではあるまいか。

本題のマグリブ地方のミナレットに関してであるが、九世紀

においてそこではアッバース朝のカリフとの各々の政治関係に  
応じて新しい塔建築を受用もしくは拒否した。具体的にはハー  
リジー派、ルスタム朝、イドリース朝そして後ウマイヤ朝の各  
政権はアッバース朝の下で建てられるようになった塔建築に無  
知であったか、あるいは異論を唱えていた。よって各新首都の  
モスクに塔は附設されなかった。一方、アグラブ朝は首都カイ  
ラワーンと、抗争とは無縁のスファックスにはモスクに塔を附  
設した。しかし、反乱の多いチュニスなどの地方都市ではそう  
しなかった。

十世紀のイフリーキヤ地方でファティマ朝が成立すると、  
後ウマイヤ朝との間で塔論争が激化する。ファティマ朝治下  
で建てられたモスクに塔は附設されなかった。それに対して自  
らをスンニー派イスラムの勝利者として示すため、アブド・ア  
ル・ラフマーン三世はコルドバに塔を建て、フェズの塔の拡張  
命令を発した。十一世紀以後、ムラービト朝の下で塔が建てら  
れることはなかった。一方、ムワッヒド朝の下でそれは再登場  
しより高く装飾性を増す。即ちイスラムであるということを外  
部へ示すしとなったのである。

スズメバチ論争——アラビア語文法学におけるベドウィンとその言語の影響について

園田 洋介

本論では、イスラーム文化の一分野として発展したアラビア語文法学の理論の形成において、ベドウィンと彼等の話すアラビア語が与えた影響の時代の経過に伴った変化について、アラビア語文法学上の有名な論争である「スズメバチ論争」を採り上げて考察した。

「スズメバチ論争」とは、八世紀末から九世紀初頭にバスラにおいて活躍した文法学者 *Sibawayh* (七九六年没) と、同時にクーファにおいて活躍した文法学者である *al-Kisai* (八〇五年没) との間で生じた文法論争であり、その争点は *Kuntu azunnu anna l-'aqraha ashaddu las'atan mina z-zunburi, fa-idha huwa hiya.*

「私は蝸の方がスズメバチよりも刺された際に痛いと思っていたが、見よ！それ (||スズメバチ) とそれ (||蝸) は同じようなものである。」

という文章において、突発性を表わす *idha* に続く名詞文の述語 (こゝでは *hiya* || 主格) が対格 (|| *iyaha*) になることが可能であるかということである。以上の争点について、*Sibawayh* は自らの類推に基づいた理論によって対格は不可能であると主張したが、*al-Kisai* はベドウィンの中に対格を用いる者

がいることを理由に、主格で言うことも対格で言うことも可能であると主張した。

この両者の論争は、最終的に論争の場に居合わせたベドウィンが *al-Kisai* の主張を支持し、彼が勝利を収めたが、このことからこの論争が行なわれた当時のアラビア語文法学におけるベドウィンの影響力を考察することができる。しかし時代の経過に伴い、特に九世紀末のバスラ学派の *al-Mubarrad* (八九八年没) と、クーファ学派の *Tha'lab* (九〇四年没) の時代以降、この論争に対する文法学者の評価は変化していった。つまり *al-Mubarrad* はスィーバワイヒの理論に基づいてこの論争についての自らの主張を展開していく一方で、*Tha'lab* は *al-Kisai* が採ったようなベドウィンの情報に基づくことなく、また *Sibawayh* ともことなる独自の主張を展開していき、その結果後世の大半の文法学者が *Sibawayh* の主張の方が *al-Kisai* よりも正しかったと主張するようになった。

以上のように「スズメバチ論争」の評価の変化を考察することによって、*Sibawayh* の時代にはアラビア語文法学において大きな影響力をもっていたベドウィンと彼等が話していたアラビア語は、時代の経過に伴い、その影響力が低下していったということが結論づけられた。



## 一八九六年クレタ八月協定の成立過程

堀井 聖恵

一九世紀、各地でナショナリズムの勃興を迎えたオスマン帝国は、西洋モデルの近代化により地方への統制回復を試みた。再集権化はアナトリアとアラブ地域においては成功を納めたが、バルカン半島では一八三〇年のギリシア王国独立を皮切りに、スラブ系民族が分離していった。

地中海に浮かぶクレタ島は住民にキリスト教徒（ギリシア正教徒）が多く、ギリシアとの繋がりが深いことから反乱を起す度にギリシアからの援助を受け、またギリシアへの併合が問題となる等、東方問題の一部となり、従来は政治史からの研究が行われてきた。しかし、クレタが一八六八年以降は特権を有する州となったことから、クレタ反乱をオスマン帝国内の非ムスリムの自治権拡大の流れとして捉えることも可能である。

本論では一八六六年反乱以降、クレタとオスマン政府の間で交わされた数度の行政改革を約束する協定に着目し、クレタ自治の内容の検討を試みた。そして行政上ほぼ自治を達成したと評価できる一八九六年反乱時に締結された八月協定から、クレタのヴァーリー（総督）の権限、クレタ議会、司法、憲兵隊にかんする条項を取り上げ、協定の交渉過程も含めて検討することにより、八月協定で約束された自治の内容を明らかにした。

また、八月協定の原案が在イスタンブールの列強大使により作成され、オスマン政府に受諾させられた経緯から、クレタ行政の改革に列強の利益が紛れ込む過程と八月協定が列強主導で成立した様子を明らかにし、列強の考える将来のクレタ行政像を明らかにすることを試みた。

本論では行政上の自治を支えるものとして財政の中央からの独立度を考えるために、そしてクレタ反乱が常に財政問題に係し、反乱の度にクレタに財政上の譲歩が行われた点にも着目し、財政のみを扱う章をたて、八月協定での財政条項の評価もここに譲った。ここではクレタの自治が開始されてから約三十年間のクレタ財政の実態と、自治権拡大の進展を財政上の譲歩から検討した。

### 清末シンガポール華人領導層に関する一考察

下山 裕子

清朝末期の英領シンガポール華人社会における領導層を考察するにあたり、まず最初に注目したのは、英国植民地政府機関の華人参事局である。これは中国人移民に関する問題を処理する華民護衛司署の下部組織で、設立の目的は、これまで華人社会に影響力を及ぼしていた会党の頭目に代わる新たな華人指導者を組織すること、中国領事の活動に対する牽制の二点が指摘される。清朝政府は財政破綻の建直しのために華人の経済力を

利用することを企画し、清末英領シンガポール華人社会において様々な活動を展開した。それらはシンガポール駐在領事によるものばかりではなく、北京からの使節団などによる直接的な働きかけもあった。だが、果たして清朝政府の活動は英国植民地政府を脅かすものであったのだろうか。同時期の華人社会の指導者たちは、それら清朝政府の活動に対し、どのような反応を見せたのか。また、自らの社会の直接の統治者である英国植民地政府に対しては、どのような態度を取っていたのだろうか。

本論は、清朝政府による懐柔政策と、英国植民地政府によって強化されつつある統治政策との狭間における、当時のシンガポール華人指導層の性格に一考察を加えることの試みである。

神崎 優子

そこで真の華人指導層の最重要条件として、英国植民地政府との繋がりやの強さを重視し、華人に与えられた役職のうちではおそらく最高位であろう立法評議会民間議員の職を取り上げ、それに任用されたもののなかから余連城、陳若錦、林文慶を対象時期における華人社会の指導層の主要人物であるとした。清朝政府は華人の民族的アイデンティティを昂揚するために様々な活動を展開し、華人の目を中国本土へ向けさせるといった点においては成功を見る。だが華人指導層にとって、それらは感情に働きかけるものではあるものの、実利獲得には至らなかったと判断する。現実の利益は英国植民地政府によって与えられるものであり、多くの華人有力者のなかで、その実利を獲得でき得る植民地政府の立法評議会という場において、自らの利益に関して発言や提案、また反対を公式に表明できる資格を持ち得た

上記三名こそが、本当の意味での華人社会の指導層ではなかったかと考える。そしてその姿勢はあくまで英国寄りであり、それは英国植民地政府統治下という前提においてこそ成り立つ、ある意味では植民地化されたシンガポール華人社会の姿である。

#### 〔西洋史学専攻〕

『聖ベネディクトゥスの規則』について

—stabilitasの用語をめぐる—

六世紀前半にヌルシアのベネディクトゥスが起草した修道規則『聖ベネディクトゥスの規則』では、修道志願の誓約として三つのものが記されている。その中で *stabilitas* の誓いは、修道士を修道院という「場所」へ結びつけるものとして一般的に「(一所)定住」と訳され、「修道制における『規則』の最も重要な貢献」と評価されてきた。しかし『規則』中の *stabilitas* の用例では、直接に「場所への定住」を示すと考えられる *stabilitas loci* の用語は見出されない。それでは *stabilitas* は本来的にはどのような意味を持つと解釈されるのか。

*stabilitas* の理念は、古典古代の伝統を背景としたキリスト教的霊性と深く関わり、神からの恩寵として「神に信頼しとどまる」、「信仰における揺るぎなさ」といった人間の神に対する

態度を示していた。『規則』でもこの理念は受け継がれ、修道士は「神にとどまる」ことと定められている。stabilitasは、このように「心の揺るぎなさ」を示す *stabilitas cordis* と、神への奉仕を実現する「場所としての修道院にとどまる」という *stabilitas loci* の両面を持つ靈的な指針として理解されよう。即ち「特定の修道院にとどまって実践される修道生活の堅忍」なのである。

だがそれとともに、同じ頃に修道士を「強制的」に修道院にとどめ社会的な身分として固定化する傾向が見受けられた。そこには本来のキリスト教的理念を超えた外的要因の影響が伺える。即ち古典古代末期より放浪修道士の弊害は社会的にも深刻となっており、修道士の彷徨と、修道院間の自由な移動を禁じる帝国法、教会法上の規制が出されていた。また個々の修道院でも、これを受けて放浪修道士に対する措置として、修道士が修道院に生涯とどまることが求められていたのである。

修道生活の在り方は一様ではなく、修徳の実践としての「遍歴」は認められ高く評価されてもいた。ベネディクトゥスが『規則』で非難したのも「遍歴」という修道形態自体ではなく、それを悪しく行なっている者達なのである。*stabilitas* には、『規則』においても修道士を修道院という場所に結びつけるという *stabilitas loci* が本来的に認められるが、修道制が社会的枠組の中に組み込まれてゆく過程でこの概念は社会的な制度としてより具体的なかたちをなして行ったと考えられよう。

ロバート・スキヤウエンと陸軍委員会

一六四三年八月―一六四五年六月

北條 雅人

一七世紀イングランドの内乱期と空位期を通じて、とりわけ一六四二年から一六四七年に至るまでの「第一次内乱」と呼ばれる時期は、従来いわゆる「ピューリタン革命研究」、つまりイデオロギーを重視する宗教史あるいは憲政史的な立場から繰り返し研究されてきたが、その反面、統治システムそのものに対する行政史的なアプローチが行われたことはほとんどなかった。しかしながら、「新型軍 *New Model Army*」と云う「常備軍」の出現が、内乱及びそれ以後のイングランド社会の政治と宗教の趨勢に疑いなく決定的な影響を及ぼした事実を見る時、この軍隊を動かし、戦うことを可能となしていたところの議会の軍事行政についてのもっとも基本的な考察すらなくしては、「革命」を語るどのようなテーゼも真に大地に足をつけてはおられないと考えるのである。

本稿は、かかる内乱史の空白を補い、イングランド史において顕著に異常かつ例外的な存在である新型軍の成立するまでを軍事行政の面から追うと共に、イングランド議会の伝統的な制度あるいは政治的原則と云ったものが、この過程を実現せしめるにおいていかなる変容を遂げたかを明らかにし、ひいては三〇年戦争から絶対主義時代の幕開けに至るヨーロッパ大陸諸国

のコンテキストに照らしつつ、イングラント史のひとつの特殊性と普遍性を知る試みである。

具体的な分析の対象には庶民院内委員会、とりわけ一六四三年に設置されてより、議会の行政機能がまったく国務会議に取って替わられるに至るまで一貫して軍事行政の中樞を占め続けた「陸軍委員会」の活動を選んだ。この委員会は当初、一六四三年の敗色を挽回するために企てられた議會軍の改革計画を立案、検討する助言の機関として設けられていたが、やがて議會による戦争指導の徹底化、戦争の全国規模の中央集権化——りわけ意志決定機構と税制の整備——が進行するのに従い、と言うよりは、その進行と相互に密接にフィードバックしつつ、段階的に権限を立体的に拡大されてゆき、ついには一六四五年の新型軍の創設と共に軍事行政の実務機関となったものである。クロムウエルの華々しい言動や、「辞退条例」の劇的な提出とそれに続く両院の激しい政治的闘争によってのみ説明されてきたところのお馴染みの過程とは明白に異なった、もうひとつの過程の変りゆく過程がここに示されている。これらふたつの過程が並行して存在した事実と、またまさにそのことよって生じた矛盾の力こそが、「早過ぎた常備軍」たる新型軍の特異性の原因、すなわち議會の崩壊から共和政、護国卿政を経て王政復古まで止まらぬ傾斜した道の始まりにつながったとするのが、本稿の結論である。

### フランス革命史とミシュレ

寺田 貴一

現代のフランス革命研究において、一九世紀フランスの大歴史家ジュール・ミシュレの『フランス革命史』はいかなる意義を持ちうるかを検討する。まず序章では、史学史的研究としてこの問題を扱うのに最もふさわしいと考えられる研究方法を吟味し、現代からミシュレを超越的に参照することは可能と判断する。次に第一章で、現代歴史学の問題としてミシュレを考える前提作業として、その現代歴史学の直面する問題を確定する。ミシュレの『革命史』に最も関連あるフランス革命史学とアナル派歴史学について検討すると、そこに浮上する問題は、個別研究の拡散と全体像の欠如であるといえる。そこで、その解決の糸口として、双方の史家から評価されているミシュレの『革命史』に着目する。第二章では、『革命史』刊行当時のフランスの状況やミシュレの個人的な事情を考慮し、また他の三つの主要な著作についてミシュレ独特の歴史思想を素描し、それをふまえた上でミシュレの『革命史』を考察する。R・バルトやH・ホワイトの手法にならないテキスト分析を行い、ミシュレの『革命史』の具体的な構成と進行のなかに全体像をつくりだす概念を見出す。それは、革命史の主人公たる民衆を中心とするミシュレ独特の一群の概念である。ミシュレの用いた民衆

の概念とは、事象を分析し説明するための概念なのではなく、動きそのものを評価し叙述する概念である。また、客体をあくまで客体として突き放し事象の機械論的説明をしようとする概念なのではなく、客体と主体との間に共有される多岐にわたった道徳的価値判断を内包しようとする概念である。これら独特の概念を使用した結果、革命史は、民衆の中の革命精神のあらわれとして叙述され、水平方向の時間の流れに沿った因果関係を排除し、垂直方向への振幅として叙述される。ミシュレの使用した概念は、概念自体が全体を志向し、分析に適した分割を許さない。その結果、歴史は一つの大きな運動に、生きた全体として還元されるのである。そしてここで使用されるすべての概念は、研究者自身の主体の中で統一という状態に融合されていく。それが「生きた全体」になっていくのであろうか。このことをもって、現代歴史学に対しミシュレ史学が持ちうる可能性として考えたい。

#### 〔民族学考古学専攻〕

#### 近世墓標の石材にみられる地域的特質

——山城国木津郷を中心に

民族学考古学専攻 朽木 量

日本の葬制・墓制史上、民間において石造の墓標が一般的に

造立されるようになるのは中世末から近世に入ってからのことである。これらの近世墓標に対する考古学的研究は、その形態に注目して型式学的に分類し、墓標型式の由来や変遷を考察した研究が主流を成してきた。その一方で、墓標がいかに地域毎に異なった歴史的背景の中で造立されるのかについては等閑視されてきた。本論文では山城国木津郷梅谷村（現京都府相楽郡木津町大字梅谷）の近世墓標を木津郷内の他村と比較した。その結果、頭部が弧状を呈し全国的な斉一性をもつ近世墓標の墓標型式の普及では木津郷内の他村より出現時期が遅れている点と、使用された石材の組成比とその恋遷については梅谷村が木津郷内の他村よりも行政的に別地域となる隣村の加茂郷観音寺村（現京都府加茂町大字観音寺）に似た展開をとげていた点が指摘でき、梅谷村の近世墓標には地域的な特異性が認められた。

こうした梅谷の地域的な特異性は墓標型式や石材といった石工に關係する属性のみ見られ、被葬者数や戒名などの属性には見られないことから、梅谷村が近隣の木津の石工ではなく、より遠方の加茂郷の石工に墓標の制作を依頼していたことが考えられる。行政的にも異なる遠方の石工に依頼するという一見非合理的な行動は、梅谷村開村とその後の歴史的経緯により説明できる。即ち、木津郷内の他村が京都と奈良を結ぶ大和街道を中心に発達してきたのに対し、梅谷村は奈良と加茂・伊賀を結ぶ加茂街道の護持管理の目的で開村したため、当初から加茂郷との間により密接な關係を有していたのである。このことは、梅谷村の屋敷の立地が加茂街道沿いに発達しているという地理

的状况によつても説明できる。

このように、近世墓標において指摘できる地域的な特異性は、単に地域的・行政的な近さという点にのみ基づくのではなく、他地域に対してもつ歴史的な経緯に関わるある種の親和性といった地域的な特質を背景として生じたものであることを指摘できる。さらに、今後の墓標研究においては考古学的に認められる地域的な特異性やその背景としての地域的な特質が、墓標を結節点として家意識の普及や石材流通の発達などの全国規模で展開する歴史上の潮流といかに関連して存在するかを考察することが必要となるであろう。

一九九四年度卒業論文題目

〔日本史学専攻〕

- |                          |       |                           |       |
|--------------------------|-------|---------------------------|-------|
| 古代日本の国際関係―加耶を中心として       | 福永浩一郎 | 享徳の乱についての一考察              | 阿部 能久 |
| 奈良時代における藤原氏の政界進出         | 高井 実  | 平氏と院との関係について              | 兵藤まなみ |
| 青馬御覽―白馬節会に関する一考察         | 石井希代子 | 縁座にみる中世の女性                | 宮川 朋子 |
| 中華思想と隼人朝貢からみた朝廷の隼人観      | 倉沢 徹臣 | 鎌倉幕府の祭祀権                  | 三尾 恒雄 |
| 太上天皇制について                | 中野渡俊治 | 土地所有権移動文書に関する若干の考察        |       |
| 伊勢斎宮―その全体像と律令国家との関わり     | 三宅 香織 | ―特に買得即時寄進型売寄進状を中心にして      | 村石 正行 |
| 日本律令国家の新羅観とその変容          | 村上 史郎 | 中世における御伽衆の存在意義            | 森 和華代 |
| ―宝亀―承和年間を中心として           | 村上 史郎 | 武州一揆の歴史的意義                | 仲上 佳克 |
| 古代国家の厭魅と民衆の呪術            | 村田 周陽 | 近世後期桐生足利の織物市場             | 石津扶美子 |
| 平安時代における勧修寺流藤原氏について      | 市橋恵美子 | 江戸時代における漢籍受容の問題           | 小松 香織 |
| 室町幕府経済と五山の経済活動           | 井浦 邦子 | 江戸歌舞伎の観客                  | 島田 倫子 |
| 中世における道南のアイヌ民族と日本人       | 北村 尚紀 | ―甘藷栽培を中心に                 | 田原 昇  |
| 元寇に関する一考察                | 高島 修  | 近世日本人のアイヌ観―第一次幕領化時代を中心に   | 辻 恵子  |
| ―恩賞・異国警固番役・石築地役について      | 高田 礼子 | 火附盗賊改の時代的変遷についての考察        | 丹生 聖人 |
| 室町將軍の御成について―三好亭御成を中心として  | 中島 麻実 | 近世における下肥と江戸周辺農村           | 山中 祐典 |
| 中世における捨子―主として悲田院との関係について | 那谷 明弘 | 暗号戦からみた日本                 | 鍵主 俊介 |
| 『義経記』の成立について             | 西原 高三 | 幕末期における民衆意識               | 松永 晋  |
| 中世鎌倉武士における主従関係           | 辺津 忠彦 | 自由民権運動の階層的研究              | 石原 賢治 |
| 中世城郭における諸問題              |       | 隈板内閣崩壊前後の貴族院―山縣閣の貴族院支配の確立 | 加賀 真次 |

本土防空作戦と官僚意識に関する一考察

—「防空法」の成立過程を中心として

藤野 浩章

明治七年から九年にかけての銃猟規則罰則規定に

関する交渉

浅田 貴典

野球害毒論争の一考察

尾崎 友博

豪州出稼ぎ移民史

木村亜紀子

—木曜島出稼ぎ移民に対する外務省の姿勢

近藤 太郎

—『中外新聞』における維新の一側面

昭和初期の風景保護問題—黒部峡谷保勝問題の考察

平松 直樹

長森藤吉郎の利権獲得行動と日本の対韓政策

—劉知幾の求めた理想の歴史書像

富永 哲正

—『史通』の成立背景と編纂目的

楼蘭とインド・クシャナ朝の関わりについて

廣田 誠也

北宋開封の国家祭祀—『東京夢華録』を中心に

細川 美樹

魏晋期巴蜀の政権と豪族

—蜀漢政権と成漢政権を中心として

後漢羌族内徙について—後漢社会の一側面

細木 基晴

映画『等待黎明』と『上海之夜』にみる香港問題

村松 弘一

—一九六二〜六六年タイ経済発展計画」における教育計画

赤松 橘子

—特に一九六〇年のカラチ・プランの発展に関連して

岡本 公樹

マレー地域における大伯公信仰の由来とその意義

奥田 直子

—一九世紀後半におけるヴェトナム抗仏運動の性格

斎藤 久志

清末中国の教育・出版文化に見る近代天文学の普及過程

斎藤 保男

辛亥革命に対する神戸華僑の対応について

鈴木 裕美

—シンガポール華民護衛司署の設立について

—ピジン・イングリッシュから見た一八・一九世紀の

中国沿岸社会

横須賀由佳

—ベトナム近代化と宗教の役割

吉村 昌生

—カオダイ教を例にあげて

岩間 一弘

—中国古代の鼎をめぐる伝説についての一試論

佐藤 仁史

—明清時期・上海地区一宗族の履歴

奉天系軍閥の性格

—中国東北地域及び日本帝国主義との関係を中心に

—京城の日本人

—東アジアにおけるひとつの「近代」

塚田 正幹

—明末郷紳地主・陳龍正の思想と社会意識

村山真理子

—宋代都市における運河と水路

山口 健

—開封と杭州を比較して

山口 健

—清初の北辺とネルチンスク条約

—初期の中露間外交体制の成立

—バルマク家の歴史的考察

金澤 香織



第一次大戦後のイギリス占領支配とメソポタミア

—ヒッタ地域を中心に

中川 麗

マラッカ王国繁栄の過程

原口 美穂

ブーリー朝治下のダマスカス(一一〇四—一一五四年)

柳谷あゆみ

ルッコルビュジエのアルジェリア計画

山川 一基

—ある建築家の「東洋」観

山口 翼

—清代の回民反乱を中心として

渡邊 訓久

ヨルダン川西岸とイスラエル化

岡野 純司

伊土戦争とイタリアのリビア支配

小川 知子

イラン社会とウラマー

北村佐知子

—イラン・イスラム革命期を中心として

三水かおる

ゲジエコンドゥに見る現代トルコ社会

高桑美佐子

商業都市イズミルの誕生と発展

—一六・一七世紀を中心に

富田 洋子

—美術史的・社会経済史的考察

西アナトリアの商業的農業と一九世紀オスマン社会の変容

中村 綾子

—一七世紀イランのモスク装飾

—イスファハーンのシャー・モスクについて

柳沢 弥生

イスラム商業とキヤラヴァン・サライ

山本 佳奈

セリム三世の軍制改革

吉岡 綾乃

〔西洋史学専攻〕

ゴシックにおける光の美学—偽ディオニシウスの影響

小林麻由子

魔女狩りに関する知識人と民衆

福井 由佳

ピエロ・デラ・フランチェスカの作品をめぐって

小川 光生

単性論派をめぐって

川本 祐二

モンゴル帝国とネストリウス派

岩田 亮介

ヨーロッパ中世都市の起源をめぐって

鈴木 結

近代スポーツの誕生—フットボールを中心として

伊藤周一朗

古代ローマの奴隷制をめぐって

松本佐保子

ユダヤ教の成立をめぐって

大庭竹 修

パブリック・スクールの成立をめぐって

水野 朋子

ジャンヌ・ダルクの処刑裁判をめぐって

大場 克美

カルタゴ滅亡論

鈴木 卓史

罪の個人的責任観—中世キリスト教との関係において

須藤 誉樹

ディオニソス崇拝をめぐって

柳恵 里子

国民革命とその連続性

遠藤 吉宗

ワイマールドイツ中間層考

奥田康一郎

ワイマール期の独ソ関係—ラパロ体制の成立と展開 進藤 正樹  
マックス・ウェーバーの議会主義化構想の形成について

モルトケの戦略とその意義

イギリスにおけるフェミニズムの背景

ヒトラーの東方政策について

ヒトラーの思想

イタリアにおける異質と同質

—イタリア都市の特質と統一における諸問題

フツガー家とジェノヴァの実業家

—スペイン・ハプスブルグ家の金融家の変遷とその特質

十六世紀後半から十七世紀前半イングランド社会

における貧困問題とその背景

近代イギリスにおける「疑似ジェントルマン」の

成立過程とその意義

中世から近世フランスにおけるシャリヴァリの慣行の特性

十八・十九世紀ヨーロッパの公衆衛生と

人々の健康について

近代イギリスにおける新聞広告と消費社会との関わり

十九世紀における教皇庁の動向

—保守体制・教皇集権体制確立についての一考察 奈良真理子

一八世紀アイルランドにおける中産階級の勃興 中尾有一郎

産業革命から考える南北問題 岩田多恵子

イギリスとお茶—イギリスにおける紅茶普及の過程 館野 朋子

セルビアにみるバルカン・ナシヨナリズムの特質 鈴木みずほ

—オスマン・トルコの軛から 鈴木みずほ

ユダヤ人解放に見るハプスブルグ帝国近代化の特質 三橋 麻子

十七・十八世紀ルアンにおける都市機能の特質 高橋 暁生

『実業ノ日本』に見る人々の支那事変支持要因について 鈴木 健太

周辺に生きた社会主義者の主張と活動

—アイルランド問題 堀越 義久

英国の駅—都市の新しい広場 吉原 学

十九世紀英国におけるコレラ流行の歴史的背景 川上 賢治

『新聞の自由』をめぐる闘い—植民地時代において 高見 麻子

ジェファソンの奴隷制度に対する態度 須藤 啓子

司法審査制の誕生 藪下 裕子

アメリカ産業革命にみる自生的産業資本の展開 阿佐見隆之

インデイアン強制移住論の変遷 大橋裕次郎

奴隷制擁護論—『アメリカ人種学派』から見た黒人観 田崎 紀子

クー・クラックス・クランの深層心理

—迷子の精神の生んだもの 米山 夏子

第二次クランにみる一九二〇年代のアメリカ社会 上田美和子

真珠湾攻撃は陰謀だったか 岡崎 健彦

丸山 剛

絹巻 淳

宇野菜穂子

奥出 裕充

神野 環

榊澤 孝史

金子 理恵

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

福田多香子

村上 真木

藤樹 潤

福田多香子

鈴木 恵一

鈴木 真人

冷戦と日米関係—米国の視点、日本の視点、国際情勢の

観点から戦後日米関係のメカニズムを見る 土方洋一郎

戦後の対日占領政策における日本国憲法制定

—天皇制を中心に 嘉手川幹也

アイゼンハワー政権期の原子力政策 竹田 和子

世界観の対決—現代アメリカ社会と中絶論争 望月 香里

マルクス思想の生成 秋山美佐子

—ヘーゲル、フォイエエルバッハとの関連から

誰に告げたのか—ファイヒテ『ドイツ国民に告ぐ』

における Nation の概念 岩村 雅人

「有機的な世紀」

—ドイツ初期ロマン主義における哲学と政治 梅村 幸輔

ドイツの大学と近代—ベルリン大学創立に向けて 小野 理奈

社会革命とユーデントウムの狭間で—モーゼス・ヘスの

歴史意識はユーデントウムの夢を見るか? 野村康太郎

〔民族学考古学専攻〕

石器接合資料の欠落部分の検討—お仲間林遺跡の接合資料から

復元した「欠落剝片」の分析を通して 足立 朋之

タイ農村の社会構造について 飯田 顕成

研究史縄文農耕論 飯田 竜起

解放政策以降における中国少数民族社会の変化と

その問題点—民族融合論と民族意識をもとに 伊藤世里子

古代エジプトにおけるミイラ製作とその社会的意義

—オシリス神話との関連において

猪野 滋

明治・大正期の馬賊についての一考察 岩本 光輝

アフガニスタン農村の社会経済的外向性について 大森 千尋

江戸遺跡出土土駄の鼻緒間比率にみる男女差について

加藤 強

群馬県における石製模造品について 河合 洋子

関東地方出土の近江系土器—弥生時代後期—

古墳時代初頭期のかながわを中心に 北村 尚子

茶の生産にみられるチベット経済の依存と自立 小林 郁子

中国長江下流域新石器時代の墓制

—副葬品から見た性別・年齢差の検討 斎藤久美子

アイヌ政策史についての一考察 齊藤 真

グノーシス主義について 坂本 修

—主にナグ・ハマデイ文書を用いて 佐宗亜衣子

縄文・弥生時代人骨に見られる損傷について

五月女亮子

相模野第IV期後半—第V期前半における

ナイフ形石器と尖頭器の様相 島 恭裕

マニ教細密画中の獣頭図に関する考察 嶋津 圭

書物の外形変化と質的变化 城 雄大

日本の観光産業におけるバリ島観の形成

歴史を告発する儀礼 助川 孝幸

—中央アンデス南部のコンドルラチ儀礼の一考察

エジプト以外のイシス、セラピス神殿における

貯水施設について 関谷恵里子

中央アンデスにおける箱型聖像祭壇の構成について 鯛 史子  
ガーナにおけるバオバブ樹の食糧・薬品利用について

円形頭光背の形成に関する考察 高畑 文樹  
高畑 紫乃  
田辺 俊雄

競走馬の改良史

藤沢市遠藤地区におけるジルの生成過程

衣裳の装飾論―沖繩の入墨を中心として 佃 和雅子  
増田 晴美

エジプト第一九王朝二つのセティI世葬祭殿の

レリーフの様式相違について―前王朝美術との比較から

真鍋るり子

ギルガメッシュ叙事詩に見られる古代メソポタミアの

死の概念について 森安 正樹

ギザの泥土レンガ寺院のアメノフイスII世石碑における

ベフデトのホルス神図形描写とアテン神の関係 八塚 哲

古代の冶金術について―鉄を中心に

近世初期における「かぶき者」誕生の背景 矢野 淳也  
横山 剛史

縄文貝塚産魚骨にもとづくスズキ漁の復元

―茨城県上高津貝塚の出土事例から 吉沢 宣雄